目次

巻頭言　実用英語教育学会　会長　釣　晴彦

第 3 回研究大会について

全体報告　実用英語教育学会　副会長　柴田晶子

基調講演　「教室を世界につなぐために子どもたちと教師ができること」
川村ジャネッテ　（通訳士）

発表　１　「英語によるプレゼンテーション能力と思考力を高めるテレビ会議システムの活用と，ファシリテーターとしての教員の役割に関する実践報告」
山崎秀樹　（北海道千歳高等学校 教諭）

発表　２　「中学校でもできるコミュニケーション活動―書くことを糸口として」
照山秀一（元 北海道千歳青葉中学校 教諭／
現 北海道石狩市立聚富小学校教頭）

シリーズ「小学校からはじまる実用英語教育　第 5 回 “Excuse me.” と “I’m sorry.”」
久野寛之　（札幌大谷大学 教授）

お知らせ

巻頭言

実用英語教育学会の第３回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長　釣　晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

第３回実用英語教育学会の研究会を終え，ニュースレターを出すに当たって一言申し上げます。今回の基調講演をして頂きました川村ジャネッテさんは，とてもパワフルでエネルギッシュに満ち溢れている方です。表情豊かに熱っぽく語りかけてきて，あっという間に時間が過ぎ去ってしまったような気がします。私は個人的には何度もお会いしているのですが，改めて講演を拝聴して思うには，川村ジャネッテさんの言葉を学ぶ姿勢は，国民性とか人柄とかだけで一括りにして語れません。とてもグローバルな視点で活動なさっています。そして，いつも相手の心と体を如何に意識的に動かすかを考えて言語教育を行っておられます。講演では，日本人の語学を学ぶ姿勢を細かにユーモアを含めて分析して，マイナスからプラス思考への転換が必要であることを強調されていました。コミュニケーション活動はどうかという前に，もっと根本的なスタイル，つまり声量，発音，ボディーランゲージなどを自然体に取り入れて活動するということ，これは，何か私たちが忘れている言語活動の原点を喚起していただいたような気がします。

2013 年 12 月 13 日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表されました。その中で，小学校の「外国語活動」を３年生に引き下げ，5 年生からは 2020 年度を目処に教科化を目指し，教科化も含めた学習指導要領の改訂について中央教育審議会に諮問するという方針が文部科学省より打ち出されました。正に今グローバル化の名の下に大きな様変わりが叫ばれている現状であります。学校に多様な動きが矢継ぎ早に要求されることはよくあることですが，そんな状況の中で，誰もが大なり小なり葛藤やストレスを抱えてしまっていることも事実であります。次々につきつけられる求めに「なぜまた？」と，同じ問いを繰り返してばかりいると疲れてしまいます。ですから，しっかりとした視点を据えることが大事です。形式的なグローバル化の波に流されないためにも，小学校の外国語活動から中学校の英語教育，高校の英語教育，そして大学の英語教育へと，不連続になるのではなく，どのように有機的に結びつけていくのかについて考えを共有し，自分達の置かれている現状を正確に分析しながら，あるべき方向性を追求していくことが必要であると考えます。

今回発表された照山先生の中学校３年間を見据えて組み立てられた教育活動は，とても大切な視点を示してくれたと思います。そして，山崎先生の高校の授業は，今後の ICT の活動についての十分な示唆を含んだ貴重な資料になってくると考えます。発表された先生方の内容はとても重厚であり，意見交換を含め，いくら時間があっても足りないくらいでしたが，今後もっと活発に意見交換ができる研究会になればと願っています。

実用英語教育学会は，活動を広く英語教育関係者の方々に発信して参ります。今後とも一層のご指導，ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第3回研究大会について

2 月 22 日（土）に，第 3 回 SPELT 研究大会が予定通り開催されました。

総会：会員 10 名のうち 8 名の出席（加えて 1 名からは委任状）を得て成立し，第 1 号議案の 2013 年度の活動報告及び決算書，と第 2 号議案の 2014 年度の活動計画及び予算書について審議され，ともに承認されました。

大会：基調講演では，通訳士としてはもちろん，様々な校種での非常勤講師としても活躍されている川村ジャネッテ先生から，在道 24 年となるご自身の体験に根差した貴重なお話を伺うことができました。講演終了後には，フロアからの質問にもエピソードを交えて丁寧にお答えいただき，大変楽しく得るところの大きい基調講演となりました。

研究発表は，北海道千歳高等学校の山崎秀樹先生と千歳市立青葉中学校の照山秀一先生による 2 本となりました。実践の内容を詳しくお話しいただくため，それぞれ 45 分と通常より長めに時間を設定しましたが，それでも時間が足りなくなるほど圧倒的に中身の濃い発表に，参加者からも日々の授業に役立てることのできるヒントを得られたと感想を頂きました。詳細につきましてはお二人の先生ご自身による記事をご覧ください。

懇親会：川村ジャネット先生は突然の仕事が入り出席願えませんでしたが，お 2 人の発表者を囲んで 12 名で楽しいひとときを過ごしました。日々の悩みを共有し，ここで培われたネットワークを英語教育の改革につなげていけるよう協力していくことが確認できました。

当日の参加者の中から 3 名の方が来年度からの会員登録を申し出てくださいました。ここに併せてご報告いたします。

（文責： 柴田）

＜基調講演＞

教室を世界につなぐために子どもたちと教師ができること

通訳士　川村ジャネッテ氏

私がネイティブとして教室で英語を話し，それに応じるよう子どもたちに求めると，自分は「英語ができない」と言って，英語が広げてくれる世界につながる扉を開くことを諦めてしまう子どもたちがいます。本当は，一歩踏み出すだけで「できる」ようになるのに，その一歩が踏み出せない子どもたちが多いのです。私たち教師がそういう子どもたちが一歩踏み出すお手伝いをする上で覚えておきたいことばがあります。John Donne（1572-1631）の ‘No Man Is an Island’ という詩の一節です。

No man is an island entire of itself; every man is a piece of the continent, a part of the main;

人はどこでもいっしょ。人間はみな同じだ。はじめはみな同じ一つの島に暮らしていた。その島がいくつもの島に分かれて，その分かれた島の上に住んでいるだけなのだということを私たち教員が忘れないということです。違う島に住んでいるうちに，違うことばを話すようになったけれども，根本的には，みな同じ人間だということです。だから，英語を話す人たちと英語で話すということは，同じクラスの友だちに日本語で話しかけるのと，本質的には変わらないことなのです。でも，同じクラスの友だちに日本語で話しかけるのにも，恥ずかしいとか面倒だと思う子がいるように，多くの子どもたちは，英語で話しかけるのが気恥ずかしかったり，面倒だったりするだけなのです。だから，私たち教師の仕事は，その面倒くさがり屋の子どもたちが，ちょっとやる気を出して，そのためのエネルギーを使えるようになるためのお手伝いをしてあげることなのです。

日本という国は島でも，日本人は島じゃないということです。これが一番大事なことです。

「日本人だから英語をしゃべらなくていい」と言い，日本という存在がいろいろな意味で自己充足的であることを口実にして，一歩を踏み出せないでいる面倒くさがり屋の子どもたちには，こう言ってあげればどうでしょう。日本という国がそんなに素晴らしい国なら，そこに住んでいるあなたたちが，海で隔てられているがためにその素晴らしさをまだ知らない別の島の人たちに伝えてあげないといけないでしょう。あなたも，外国の人たちも同じ「人間」としてつながっているんだから，何か素晴らしいものがここにあれば，それを外国の人々に伝えなくちゃいけないんだと。

日本人は何事も完璧でないと恥ずかしいという思いを持つ人が多いですね。だから「できない」と言う。子どもたちもそうだとしたら，完璧である必要はないということを教えてあげたいですね。あなたがたが完璧でないなら，隣の島に住んでいる人もあなた方と同じ人間なんだから，完璧じゃないはずだ。だから，英語を話すのに完璧でなければ恥ずかしくてしゃべれないなんてことはないんだということを。

自分は「頭が悪いから英語はできない」という声もよく聞きますね。この世界にことばのできない子どもはいない。遅い早いの差はあっても，だれもがことばを話せるようにできている。どこかの島で英語が話せるようになる子どもがいたら，日本という島にたまたま生まれてきたあなたにも，英語が話せるようになる力がちゃんと備わっている。同じ人間なんだから。だから，急がずに，続けることが大事なんだと教えてあげたいものです。

自分は「英語が嫌いだから，英語はできない」と言う子どもたちがいます。でも，そういう子どもたちには，食べ物の好き嫌いはなかなか変わらないけれど，勉強することの好き嫌いには，あしたにでもころりと変わってしまう可能性があるということを思い出させてあげたいですね。

「できない」理由を見つけては，一歩を踏み出すことを面倒がってやらない子どもたちは，自分から世界につながる扉を閉めてしまっています。この扉を自分で開いて，一歩を踏み出すにはエネルギーが要りますが，全ての日本人に，そのための十分なエネルギーが備わっていると思います。日本人同士のコミュニケーションを見ていると，男性も女性も，話す相手によって，話すときの声のトーン（調子）を強く高くしたり，逆に，弱く低くしたりしています。例えば，相手が目の前にいないのに，電話などで男性が上司と話をしたり，女性が丁寧な話し方をする時は，声の調子が強く，高くなりますね。そういうエネルギーを日本語で日本人同士で使っているのですから，そのエネルギーを，“同じ人間”として外国人と英語でコミュニケーションするために出し惜しみしないように，私たち教師は工夫が必要です。私も，どうしたらこの日本人のエネルギーを引き出せるか，いまも工夫を重ねています。私は，“No Man Is an Island”ということを忘れずに，何でもそろっているこの素晴らしく贅沢な国でわがままに育ち，恥ずかしがり屋で面倒くさがり屋の子どもたちが，自分たちで閉じている扉を開いて，外に一歩を踏み出すのを手伝う努力を，皆さんと一緒に続けていきたいと思います。

質疑応答の時間でのやりとり

まず，「ぼそぼそと小声でしか英語で話さない子どもたちにどう対処したらいいか」という質問が出て，それに対して，「わからないことはわからないとはっきり言うことが大事。“Huh? Excuse me. I didn’t understand.” と言って，大きい声で言わなければ相手に分かってもらえないということをしっかり示さないといけない。」という答えが返ってきた。そこから，話が広がり，「英語の授業でのエネルギーの出ししぶりは，英語だからと言うわけではないと思う。ソチ・オリンピックを見ていても，日本の選手は感情を出さなさすぎる。メダルを取れなかった選手は，もっとはっきりと悔しさをことばや表情に出せばいいと思うのに，そうならない。こういう日本人のおとなしい，闘争心をむき出しにしない性質は，同じアジア人でも中国や韓国の人たちと比べて際立っている。」そんなおとなしい日本人が英語によるコミュニケーションにおいて大きなエネルギーを使うように指導するには，指導する側の方に，もっと大きなエネルギーが必要になるかもしれないというような趣旨の文化論へと広がり，10 分の質疑応答があっという間に終わった。　　（文責：　編集委員）

＜研究発表＞

発表１：　英語によるプレゼンテーション能力と思考力を高めるテレビ会議システムの活用と，ファシリテーターとしての教員の役割に関する実践報告

北海道千歳高等学校　教諭　山崎秀樹 先生

本研究発表は，北海道千歳高等学校国際教養科３年生の専門科目「時事英語」において，テレビ会議システムがどのように活用されるべきかについて報告したものである。この科目の主な目的である，プレゼンテーション能力の向上に関して，特にファシリテーターとしての教員がこのシステムをどう活用していくかについて詳しく述べた。

本校テレビ会議システムは，CISCO 社のテレビ会議装置を使用し，オーストラリア　ニューサウスウェールズ州立ニューイングランド大学の Asia ConneXions という政府支援のプログラムに参加することで可能となっている。同州内の中等学校とのテレビ会議による交流を通して，日本語や日本文化を伝えながら，英語による発表活動を通して「伝わるプレゼンテーション」力向上を目指すものである。このプログラムは政府の政策である「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」(2012 年 11 月)に裏付けられている。この中では，インド，中国，インドネシア，日本の４カ国の言語が「優先言語」として位置づけられ，将来の経済交流の発展を目指した経済政策と，オーストラリア国内のブロードバンド化推進政策に支えられている。

相手校は，人口５０００人の小さな農村にある高校の日本語クラスである。オーストラリア人の英語兼日本語教師が日本語を教えているが，僻地と言うこともあり，生の日本文化や日本語に触れる機会を熱望している。こちらとしては，自分たちの学んでいる英語を実際に試す場が増え，同時に自分の社会や文化，言語について，「教えるために知る」絶好の機会である。双方のニーズが一致していることと，時差が少ないことや，相手校が日本研修旅行を行っていることも，テレビ会議の効果的な実現に寄与している。

本校の「時事英語」は，日本国内外の最新の話題について，英語を用いてリサーチしたり，意見を述べる専門科目であり，特に「異文化間におけるプレゼンテーション能力向上」を目指しているが，テレビ会議の導入により，年間５７時間(コマ)の総授業時間中，今年は１５時間(コマ)，テレビ会議による交流ができた。

生徒へのアンケート結果から，成果として顕著なのは，①「相手に伝わる」プレゼンテーション能力の向上，②評価を行わない同世代の聞き手がいることによる意欲の向上，③自国の文化や言語への興味の深まりと知識の必要性の認知，④即興的な反応が必要な場面への慣れ，⑤視覚教材(Visual Aids)の活用と必要性の認知，⑥知っている知識を無理なく使うプレゼンテーションが効果的であるという気づき，である。テレビ会議の目新しさもあるが，教師や ALT 以外の同世代の友人に伝えるというテレビ会議の authenticity（自然さ・現実性の度合）に加え，先方の教室や生活の様子なども見られるため，異文化理解の効果は間違いなく存在し,それがリアルなプレゼンテーションへの意欲となっている。

テレビ会議によるプレゼンテーションを,「時々大々的に行うイベント」ではなく「日常の授業」として導入するには，①生徒同士のコミュニケーションの機会作り，②心理効果，③発表させるコンテンツ，④異文化理解的視点，⑤授業（生徒指導）マネジメント，⑥評価，などの分野で「仕掛け」と「コツ」が必要であり，教師が自らカメラに向かって話すのではなく，あくまでも生徒同士のコミュニケーションをスムーズに，時に「チャレンジング」にサポートしていく「ファシリテーター」としての立場を保つ必要がある。

生徒の英語力を把握し，難しいことを頑張って発表させるよりは，自分の持っている語彙や知識

を使い無理なく自然にプレゼンテーションを行う工夫をさせたり，発表のスクリプト(原稿)を「書く」→「話す」→「説明する」プロセスを踏ませたり，日本語を学んでいる相手方に対して日本語でプレゼンテーションを行う場合は，相手がわかる語彙や表現などを使用し，自分の言語をコントロールする配慮も必要である。また，テレビ会議の即時的かつ双方向的な性格から，タイミングよく適切なフレーズを使う訓練や，それがうまく出来ないことに苦しむという経験も可能になる。

生徒同士が何を話題にするか，コンテンツにも配慮が必要である。今回は先方が関心を持っている日本語の文法事項や，日本研修旅行に役立つ情報やフレーズ，日豪の観光事情，オリンピックなどの共通の話題をテーマにプレゼンを行い，それについての考えを交換するなど，プレゼンテーションからディスカッションにも発展できるよう工夫した。また，「時事英語」で毎年触れている，OECD の BETTER　LIFE　INDEX に関する報道を読み，意見をまとめる活動も役に立った。オーストラリアはこの調査で３年連続首位の「最も幸せな国」である。一方，日本は加盟国３４か国中２２位である。なぜオーストラリアが首位で，生徒の多くが日本語が通じ，便利で快適で住みよい国だと思っている日本の順位が低いのかを議論することもでき，オーストラリアとの比較から「日本に向けた提案」を行うエッセイ課題としても活用できた。

また，テレビ会議では生徒が活動の主体となるよう，MC 役を募り，生徒たち自身でその時間のプレゼンテーションやディスカッションを進めてもらうようにした。これにより，プレゼンテーションをスムーズにさせ，意見の交換の場を作るという重要な役割を生徒たちが責任を持って行うことになる。また，４人１組のチームで役割分担を行い，期日まで完成させて発表するため，チームワークと責任感も育つという心理的な効果も表れた。

今後テレビ会議の機材はさらに普及していくと思われるが，テレビ会議システムを用い，生徒の英語を使う能力を最大限に引き出すために求められるのは，生徒を参加させる仕掛け作り，生徒が課題に取り組む意欲を向上させる方策と，生徒が困ったときに支援するファシリテーターとしての教員の役割である。

発表２：　中学校でもできるコミュニケーション活動―書くことを糸口として

北海道千歳市青葉中学校　教諭　照山　秀一　先生
（現　北海道石狩市立聚富小学校　教頭）

到達目標としての表現活動

今回の発表では，中学校において表現活動を具体的な到達目標として設定し，発信力の育成を図っている実践事例を紹介した。

現在，到達目標として設定している表現活動と中学校３年間で学習する文法事項との関係の例を（表１）に示す。それぞれの表現活動は，３年間のつながりを２つの側面（文法習得面と内容の面）から考えて設定している。

	1学期	2学期	3学期
１年生	Be 動詞，一般動詞（1･2 人称）	一般動詞（3 人称）	Can，過去形
	有名人紹介，自己紹介	家族紹介，私の一日	What am I?　日記１
２年生	過去形，未来形	不定詞，助動詞，比較	複文，There
	日記２，旅行の計画将来の夢	日本の学校生活，好きな季節	学校案内
３生生	現在完了，比較	関係代名詞	
	修学旅行感想	日本文化，私の宝物	卒業における詩

（表１）中学校で学習する文法事項と表現活動の関係の例

文法習得面では，既習の文法事項 A に，A+B, A+B+C という形で新出の文法事項を順次積みあげていくよう設定している。例として１年生の初めの「有名人紹介」では「be 動詞」を，次の「自己紹介」では「be 動詞」と「一般動詞の１人称」を使い表現させていくという流れである。

このように表現活動を繰り返すことにより，語彙や文法事項の定着や多様な表現方法の習得へとつなげていくことができる。

一方，内容面でも，成長にあわせ，生徒自身が興味・関心を持って取り組むことができるように設定している。大きく分類すると，１年生では fun(書くことに出会わせ，楽しみを感じさせる)，２年生では interesting(ある程度まとまりのある文章を書かせ,「自分」が「読み手」を意識してどのように書くかということを考えさせる)，３年生では moving(想像力・創造力を使いながら英語を書く,「自分」の気持ちを「相手」に伝えるには「どのような表現」をしたらよいのかということを考えさせる)という３つの段階に分けられる。

さらに，それぞれの表現活動は，生徒同士がお互いに理解しやすいものとなるよう学校生活を中心とした身近なテーマで設定している。

英語を使い生徒同士がコミュニケーションを行うためには，お互いが理解しあえる内容でなければならない，そのため，経験や学習を通して貯えてきた「スキーマ」が共通化している，学校生活を中心とした題材を設定することにより，効果的なコミュニケーション活動とすることができる。

文章構成の指導

生徒に日記などの表現を書かせると，同じ文型や主語が繰り返され続くような，I like～. I like～.という単調で稚拙な文章となりがちである。そこで，学習した文法事項を使いどのような文を書くことができるのかを，基本パターン（表２）を構成し，生徒にモデル文で示すとともに。基本パターンに沿いながら書かせるようにしている。

（表２）日記の基本パターン
①やったこと（一般動詞）
②あったもの（There）
③その様子（be 動詞）
④感じたこと（一般動詞・be 動詞）

さらに，基本パターンに沿いながら４文から少しずつ文章を増やしていくように，前回の表現活動で扱った事項に積み上げるというやり方で指導を行っている。

また，中学生の語彙力では，まとまった内容をすぐに表現できるだけの語彙力や文法力が不足している。そのため「書く」活動を通し，多少レベルを落としても，既習事項や知っている単語を組みあわせ「いかに英語で表現するか」というスキルの育成も図っている。

「書くこと」と「話すこと」を関連させた指導

このように書いた文章は,「話す」表現活動（スピーチ，ALT とのインタビュー）にも再活用させている。生徒自身が書いた身近で意味ある内容でのコミュニケーション活動は，自分の考えを伝えることができたという自信にもつながる。

コミュニケーション能力を育成するために，相手に伝えることを意識して書かせ，文と文のつながりなどに注意して練り直す機会を設けるなどの,「書く」ことを糸口として「話す」ことにもつなげる表現活動を行うことでコミュニケーション能力を高めるよう指導を行っている。

シリーズ　小学校からはじまる実用英語教育

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

第５回　「“Excuse me.” と “I’m sorry.”」

どうして “Excuse me.” と “I’m sorry.”?

“Excuse me.” も “I’m sorry.” も，英語学習のかなり早い時期から登場する表現ですね。当然小学校の英語活動でも出てくるはずです。そんなごく当たり前の二つの表現を，なぜこのシリーズでことさらに仰々しく取り上げるのか，今回はそのお話から始めたいと思います。それでは，まず，私自身の恥ずかしい思い出から。

“Excuse me.”（すみません）

（いいえ）⇒”No.”

まず，クイズ第１問。混んだバスの中で吊革につかまっているあなたのうしろを “Excuse me. Excuse me.　Coming though.”（すみません。すみません。通ります。）と言いながら通っていく外国人に「いいえ」と言いたい時は，軽く“No.” と言えばいい。これ，正解？不正解？あなたの答えが「正解」だったとしたら，ちょっと “まずい” です。というのも，この場合の「いいえ」は “Sure.” とか “Oh, that’s OK.” とか “No prob(lem).” であって，“No.” ではダメです。“Excuse me.” は「私（の失礼）許してください」というお願いですから，そのお願いに対して “No.”（許さないよ）は，まずいですね。この場面で “No” と言うのは，日本語の「いいえ，あなたは何も失礼なことはしていません」とは真逆の意味を伝えることになってしまいます。でも，28 歳で留学して間もなくの私は，まさにその真逆のことをやってしまっていたのです。日本語を英語に直訳することから来る大失敗ですね。聞く，読む，書く力だけなら，TOEFL (PBT) 630 点，GRE 1,100 点で，普通レベルの北米の大学院は軽くパスできる英語力を持っていても，話す力は小学生以下。それが私の実態でした。

第１回：　○と×
第２回：　数と数字
第３回：　アルファベット
第４回：　“Nice to meet you.” と “Good to see you.”
第５回：　“Excuse me.” と “I’m sorry.”
第６回：　“Sir” と “Ma’am”
第７回：　“Uh-huh”・“Uh-uh”・“Uh-oh”

直訳の代償 ― “Excuse me.”の場合

自分で “No” と言った直後に「あ，違う。”No” じゃなくて，“No prob.” とか “Sure.” だった」と気づくのですが，口をついて出るのは “No”。アメリカ生活が始まって１カ月くらいは，そんなことが続いたでしょうか。この失敗が起こるのは，大体が朝。まだ寝ぼけた頭で寮の部屋を出て，すぐ近くのカフェテリアへ朝ご飯を食べに行ったときのことでした。自分の欲しいものを給仕係の人に言って取って行くビュッフェ式でしたから，トレーを持って列に並び，少しずつ前に進んで行きます。当然，私を飛ばして，もっと前の料理を取りに行く学生もいるわけで，そういう学生が私の後ろを通り過ぎる時にちょっと身体がぶつかることは毎日のように起こります。ぶつかった学生は，“I’m sorry.” か “Excuse me.” と言います。日本ではきっと「“Excuse me.” と言え」と習う場面ですが，全く普通に “I’m sorry.” と言う学生もいま

す。あとでも述べますが，要は，言う側の気持ちの問題ですね。まあ，それはともかく，英語で“Excuse me.”と言われて，日本語の「いいえ」の意味で“No.”とか“Not at all.”と答えてしまっては，繰り返しになりますが，日本語の「いいえ」とは全く正反対の意味になってしまいます。幸い，“No”と言った相手に食ってかかられることはありませんでしたが，「こいつ，何でこの程度のことで“No”なんて言ってやがるんだ？東洋人って，訳わかんねぇや」と，さぞかし不思議がられていたことでしょう。

“Excuse me.”に対して日本語の「いいえ」に当たる反応は，“Sure.”／“Oh, that's OK.”／“No prob(lem).”だと，頭ではわかっていても実際には“No.”が口をついて出た理由は何でしょう。それは，「いいえ」を直訳していたからにほかなりません。別の言い方をすると，**いちいち直訳しなければならないほど，“Excuse me.”への応答が自動化，習慣化されていなかった**ということです。日本で，ということはつまり，英語の授業で，自分のクラスメートに“Excuse me.”と言う機会が圧倒的に足りなかったということですね。

だから，小学校のときから，“Excuse me.”と言われたら反射的に，“No.”じゃない適切な答えを返す機会を何度も何度も経験させて，そう言う癖をつけておくことが本当に大事だと思います。「そこまでしなくても」というのは，失敗した経験の無い人が言うことです。感謝と謝罪は対人関係の構築と維持のための基本中の基本の言語行動です。子どもたちがこれをうまくできずに現実生活で人間関係を損なう可能性は限りなくゼロにしてあげたいものです。

意訳の代償―“Excuse me.”の場合

“Excuse me.”と言われて，とっさに“Sure.”と私が答えられなかったもう一つの大きな理由は，**“Excuse me.”を「すみません」と覚えていた**ことです。“Excuse me.”を教える初級英語の授業では，その文の意味を，「わたし（の失礼）を許してください」と教えるより，「すみません」と教えた方が，はるかに“わかりやすい”のは確かです。でも，その教え方では，なぜ“No.”と答えちゃだめなのかという疑問に答えることはできません。また，もっとあとになって，私のように，“No”と言ってはいけない場面で“No”と言ってしまうことにもなりかねません。この連載の前回の記事で，小学校の頃から教えていきたいこととして，“Nice to meet you.”は，「はじめまして」とか「どうぞよろしく」ではなく「会えて良かった」と，また，“Good to see you.”は「また会えて良かった」と，ともに相手と会えたことに対する喜びを伝えるものだということを力説しました。今回は，“Excuse me.”です。この表現を「すみません」と意訳して教えるのではなくて，「わたし（の失礼）を許してください」を意味する表現として教え，だから“No”じゃだめなんだってことを体験的に分からせてあげたいものです。“Excuse me.”と言ったり，言われたりする場面を実際に経験させて，忘れ難いエピソード記憶として蓄積させたり，何度も何度も繰り返して経験させることで，この行為が手続き記憶として自動化されるようになればいいなあと思います。

直訳の代償―“I'm sorry.”の場合

すみません。（I'm sorry.）

何が「すみません」なの？

（What are you sorry for?）

友だちのホストファミリーのおばあちゃんが亡くなったから…（The grandma of my friend's host family has passed away.）

外国語を習い始めたばかりの学習者によく見られる傾向を表す概念に“naïve lexical hypothesis”（素朴語彙仮説）[1] というものがあります。学習している言語の語彙と自分の母語の語彙との間には完全な１対１対応があると思い込む傾向のことを指します。これを傾向と呼ばず，学習者自身が好

[1] Bland et al. (1990). The Naive Lexical Hypothesis: Evidence from Computer-Assisted Language Learning, *The Modern Language Journal*, 74(4), 440–450.

んで選ぶ学習方略（学習ストラテジー）と言うこともできるでしょう。習いはじめの頃は，誰だって《各単語に訳は１つ》という方が有難いものです。だから，例えば，“like”＝「好きだ」と覚える。ところが，その１対１の対応がうまく記憶されればされるほど，その等式に変更を加えることが難しくなります。つまり，「～のような」や「～のように」といった別の意味を後から付け足して記憶することが難しくなる。これが “naïve lexical hypothesis”（素朴語彙仮説）の最大の問題点です。

日本語の「ごめんなさい」と英語の “Sorry.” との間にも，かなり早い時期に，１対１の意味対応が確立されます。日本語は《謝罪の王様》[2] の言語ですから，「ごめんなさい」を英語で何と言うかは，日本人にとって最も重要な情報の一つです。そこに “Sorry” が登場し，“Sorry”＝「ごめんなさい」の等式が成立すると，この等式の左辺に「ごめんなさい」以外のものを代入することはきわめて困難になります。そんなことないだろうと思われる方は，ぜひ中高生で実験してみていただきたい。“Sorry” には，「ごめんなさい」や「すみません」のほかに，「残念だ」，「気の毒に」，「かわいそう」という意味もあるということを生徒さんたちに教えてみてください。“Sorry”＝「ごめんなさい」の等式が完成している中３から高校にかけてなら，この実験をしてみる条件が整っています。1，2 度口で説明すればすぐにわかってもらえるような代物ではないことをきっと実感されることでしょう。

もちろん，これは日本人だけの問題ではありません。外国語を学習する者にとって力強い《味方》であるはずの素朴語彙仮説の《反逆》は，英語を学習している日本人にも，逆に，日本語を学習しているアメリカ人にも起こります。一つ，面白い例を紹介しましょう。今から 25 年ほど前，80 年代の後半に函館の北海道国際交流センターという NPO が主催する 8 週間のホームステイ・プログラムで日本語を教えていたときのことです。アメリカの大学で１年間日本語を勉強して参加していた学生と次のような，誠に興味深い会話をする機会に恵まれました。

学生： 久野先生，とてもすみません。リサさんのため。

久野：どうして？

学生： リサさんのホストファミリーのおばあさんが死にました。

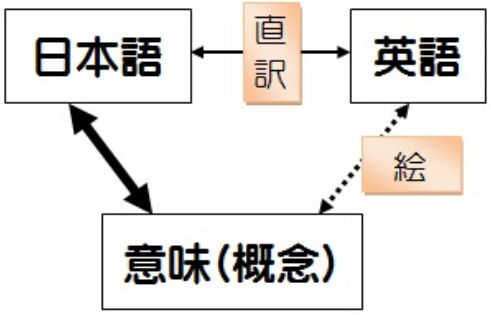
つまり，この学生は，「すみません」じゃなくて，「私は，リサさんがかわいそうです。」（I’m sorry for Lisa.）と言いたかったのですが，1 年目レベルの初級日本語教育では “Sorry”＝「すみません」としか習わないので，「すみません」と言うしかなかったのです。

“Sorry”＝「ごめんなさい」の等式を崩す戦略

では，この素朴語彙仮説のパワーを打ち破って，子どもたちに “Sorry” ＝ 「ごめんなさい」AND “Sorry” ＝「残念だ」という新しい連立式を受け入れさせるにはどうしたらよいでしょうか。それには，二つの方法があります。そして，発達段階に応じて，この二つの方法プランＡとプランＢとを順次適用していくとよいのではないかと思います。

プランA エピソード記憶を構築する

語彙習得の研究では，初級の学習者の場合は，英単語の意味を別の英単語を使って教えるよりも，母語である日本語の単語で説明して教えた方が習得に役立つことがわかっています。さらに，日本



日本語（直訳）又は 視覚情報 のいずれか一つだけを媒介にした記憶よりも，その組合せによる記憶の方が強度に優る。

語だけよりも，日本語と絵（視覚情報）の両方を使って説明した場合の方が習得効率が良いこともわかっています。つまり，英語の表す意味（概念）は，対応する日本語に直訳して日本語を媒介とし

[2] 『謝罪の王様』は 2013 年の日本のコメディ映画（東宝）。脚本は宮藤官九郎，水田伸生監督，阿部サダヲ主演。

て学ばせると同時に，その意味（概念）そのものを直接表す視覚情報を介して学ばせることで，脳の中で英語と意味（概念）とを結びつけるチャンネルが２倍になり，より効果的に記憶，習得できるということです。

「日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めることができるよう…指導する」(指導要領）とされている小学校の外国語活動は，そのような指導法にはぴったりです。日本語の「ごめんなさい」と「残念だ（った）ね」という 2 つの概念と英語の “Sorry” という一つの言語形式を「直訳」式で無理やりつなぐのではなく，「ごめんなさい」を言う場面と，「残念（だった）ね」を言う場面を沢山経験させ，その経験の中で “Sorry” という言語形式が２つの意味としっかりつないで記憶されるよう促すのです。私が一番提案したいのは，小学校で頻繁に行うクイズやゲームの中で年がら年中使うことです。クイズの答えがハズレだった時には “(I'm) sorry, (but) no!” (残念だけど，答えは外れ！)，あるチームがゲームで負けた時には “Oh, no. (I'm) sorry.” (あっちゃあ，残念だったね) と，何度も何度も「残念だね」の “Sorry” を子どもたちに聞かせてあげることです。

プランB ３種類の “I'm sorry.” を “for” と “about” で区別する！

中高になると文字が使えますから，会話を文字を通して経験させることができます。そこで，“Sorry” が「ごめんなさい」になる文脈と，「残念だ」になる文脈をいくつも作って，両方の意味が存在することを理解させます。それがわかっているかどうかを確認する上手い方法として，「ごめんなさい」の**謝罪の “Sorry.” は “Sorry for that.” という決まり文句で，同情の “Sorry.” は “Sorry about that.” または “Sorry for [人].” という決まり文句で使う**という慣習が使えます[3]。例えば，次のような例を考えてみましょう。

A: Hi, Betty! How are you doing?
B: Well, not too good, actually.
A: (　　). Take care then, Betty!
B: Thanks, Paul, I will.　Good to see you!

この短いやり取りの中で，(　　) の中に謝罪ではなく同情の一言が来るのはわかります。そこで，“Sorry for that.” か “Sorry about that.” か，どちらを言うべきかを問うのです。(答えは章末)

では，次の例はどうでしょう。

A: Hi, Betty!　How are you doing?
B: Not too good.
A: You sure don't look well.　What's wrong?
B: Well…, my dog died last night.
A: That cute one?　Oh, I'm (　　).

さらに，これはどうでしょう。

A: Do you remember what you said to me last night?
B: No.　What did I say to you?
A: You said I was fat in front of my friends! You hurt me so badly.
B: I did?　I'm terribly (　　).

この程度の短い，でも文脈が明確で，謝罪と同情のどちらかがはっきりとわかるやりとりをいくつも用意して，子どもたちに考えさせます。10 個も用意すれば，“sorry” には二つの異なる意味があるということを子どもたちに印象付けるには十分だと思います。実験はしていませんが…。

最後に･･･“I'm sorry.” と “Excuse me.” の違いについて

この二つの表現の違いについて考えることは，日本語について考える良い機会にもなり，まさに，指導要領に書かれた小学校外国語活動の趣旨にも合致します。指導要領によれば，小学校の外国語活動は「日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深める」ため，「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付」かせる内容であることが求められています。“I'm sorry.” と “Excuse me.” の違いを通して，日本語の「ごめん

[3] 明らかに反省ないし謝罪の必要な問題行動について “Sorry for that.” とは言わず，“Sorry about that.” と言うと，《そんな困った状態にしてしまってごめんなさいと，自分が謝罪すべきなのに，「そりゃ困ったことになったね」と，まるで他人がやらかしたことであるかのように無反省な態度を示す》ことになります。自分が自分に対してやらかした問題行動なら，自分に謝罪するということはありえませんが，自分自身を気の毒に思う心情は表現できますね。だから，当然のことながら，“(I'm) sorry about that.” は，自分の愚かな行動を自戒する表現ということになります。

なさい」や「すみません」という，子どもたちが日常ごく当たり前に使っている表現の意味をより深く理解する絶好のチャンスとなります。

ことばの中には，一つのことばが全く異なる二つの意味を持つことがあります。最近の例だと，「やばい」がわかりやすいかもしれませんね。この「やばい」という形容詞は英語の “bad” と似ています。“bad” は，文脈によって，“cool”（かっこいい）という意味にも「悪い」という意味にも使われます。「やばい」も，「（警察沙汰になるような）危うい，危険な」という意味と，「すごく良い」という二つの意味を兼ね備えています。

実は，「ごめんなさい」や「すみません」にも，同じような現象が見られます。これらに「ちょっと」をつけて，「ちょっとごめんなさい」，「ちょっとすみません」と言うと，何か相手に不都合なことをする前に，事前の警告やと事前の謝罪をすることになります。例えば，混み合った電車を降車しようとして，通路の乗客の間をすり抜けながら言うことばですね。ところが，すり抜ける際に自分の服が誰かの鞄につけられていたマスコットに引っ掛かって，それを引きちぎってしまったことに気がついたら，決して「ちょっとごめんなさい」や「ちょっとすみません」とは言いません。「あ，ごめんなさい」とか「あ，すみません」と言うはずです。

英語では，「ちょっとごめんなさい（↗又は↘）」に当たるのが “Excuse me.” で，「あ，ごめんなさい（↘）」が “I’m sorry.” です。どちらも謝罪の意味ですが，前者は相手に不都合・不愉快を与える行動の前に，後者は与えた後に発することばです。おそらくこれと同じ理由から，相手の言ったことが聞き取れなかったり，意味不明の発言や，信じられないような不愉快発言をされたりした場合，次の一言を言う前に，”Excuse me?” (_↗) と言います。これは，「えっ，今何ておっしゃいましたっけ。ちょっとすみませんが，もう一度おっしゃってくださいませんか」という意味ですね。日本語では，「はい(_↗)？」と聞き返すところですね。

でも，**“I’m sorry.” と “Excuse me.” のどちらも人に不都合や不愉快を与える行為を行った後に発せられる場合もあります。**その場合の違いは，“Excuse me.”は，その行為が「不可抗力」によるもので，**自分に責任があるわけではないというニュアンスを伝えるのに対し，自分に非があることを認める表現が “I’m sorry.”** です。昔の英語教師は，よくアメリカで自動車事故に遭った場合のことを取り上げ，日本で「どうもすみません」と言うようなつもりで安易に “I’m sorry.” などと言うと，事故の責任を 100%負わされて大変な目に会う。だから，おいそれと “I’m sorry.” と言うもんじゃないと教えたものです。でも，それはアメリカの訴訟事情を知らないばかりか，“I’m sorry”=「すみません」という素朴語彙仮説にとらわれた人たちの行き過ぎた一般論です。アメリカの訴訟というのは，事故現場で相手に言った一言でどうこうなるほど甘くはありません。最後は，何より弁護士の力です。また，この場合，弁護士がいなくても十分に勝算はあります。事故現場で「悪い」と思ったら，正直に “I’m sorry.” と言っても全く問題ないのです。というのも，仮に現場では本当に「悪い」と思って言った一言でも，すでに見た通り “I’m sorry.” には，謝罪，自戒，同情という少なくとも 3 種類の意味があるので，「あの時の “I’m sorry.” の意味は，謝罪の意味で言ったのではなく，同情の意味で言ったのだ」と言えば，「おまえは謝罪した！」と追及されることはありません。

そんなことを考えると，私たちは本当に素朴語彙仮説から卒業しなくてはいけませんね。そうすれば，事故現場でもおたおたせず，日本人として普段の自分らしく堂々と「すみません」と言うことができます。このように，“Excuse me.” や “I’m sorry.” といった対人関係構築上きわめて基本的な表現の意味や用法に小学校のうちからよく習熟しておくことは，まさに後に役立つ本物の実用英語だと言えるのではないでしょうか。

英語では，
「ちょっとごめんなさい（↗又は↘）」
に当たるのが “Excuse me.” で，
「あ，ごめんなさい（↘）」が
“I’m sorry.” です。

解答例：1 つめの会話（Sorry for you. または Sorry about that.）；2 つ目の会話（Sorry for you. または Sorry about that.）；3 つ目の会話（sorry for that.）

お知らせ

◆ ホームページもご覧ください

実用英語教育学会のニュースレターや紀要などがアップされています。こちらです⇒http://spelt.main.jp/

◆ 会員募集のお知らせ

実用英語教育学会では2014年度新会員を募集しています。年会費は一般会員4,000 円(学生,院生3,000 円)です。

◆ 新規入会の申込手続き

メール（電子メール）による入会申込みあるいは郵便振替による会費納入によって，入会手続きを完了することとさせていただきます。メールのメッセージ本文に下記の必要事項をご記入いただき，事務局までご送信ください。なお，SPELT のホームページのフォーム(FORM)を使って申込手続きを行うこともできます。⇒お申込用フォームへはここから

- 漢字御氏名（例：　北海　道子）
- ローマ字御氏名（例：　HOKKAI Michiko）
- 御住所（郵便番号を含み，都道府県から始めて御記入願います。なお，その御住所が【自宅】か【勤務先】か，【公開】か【非公開】かの別を明記してください。）
- 御電話（半角英数でハイフンを付けて下さい。御住所同様，【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別，並びに，【公開】・【非公開】の別を明記してください。）
- 御所属（大学生，大学院生の場合は【学生】と明記して下さい。）
- メールアドレス（普段からお使いのものを御記入ください。また，携帯電話のメールアドレスはなるべく御遠慮ください。【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別，【公開】・【非公開】かの別も明記してください。）

◆ 年会費納入の手続き

学会事務局（下記口座）まで，必ず送金者氏名を明記のうえご送金ください。なお，恐れ入りますが振込み手数料は各自でご負担願います。

【名義】実用英語教育学会

ゆうちょ銀行　記号　１９０６０　番号　１０３１２６２１

※他の金融機関から振込みする場合

【店名】九〇八（読み　キュウゼロハチ）

【店番】９０８　【預金種目】普通預金【口座番号】１０３１２６２

編集後記

今回は，第３回研究大会の様子をお届けしました。大会は素晴らしい内容でしたが，そのご報告を兼ねたニュースレターの発行が，諸般の事情により，約１カ月も遅れることになりました。深くお詫びいたします。次号は，10 月の研究会後，11 月末発行の予定です。どうぞご期待ください。また，10 月の研究会にも是非ふるってご参加ください。

実用英語教育学会

編集：*SPELT Newsletter* 編集委員
（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2014 年 4 月 30 日

事務局：〒065-8567　札幌市東区北 16 条東 9 丁目 1 番 1 号
札幌大谷大学社会学部地域社会学科 久野寛之 研究室内
TEL:　011-742-1899（直通）Fax:　011-742-1654（代）
Email: info◎spelt.main.jp　※◎を@にご変更願います。